

MUSHIN-AN

無心庵

東京都北区飛鳥山 旧渋沢氏邸内
(昭和20年4月15日戦災で焼失)

↓全景 右手が躰口



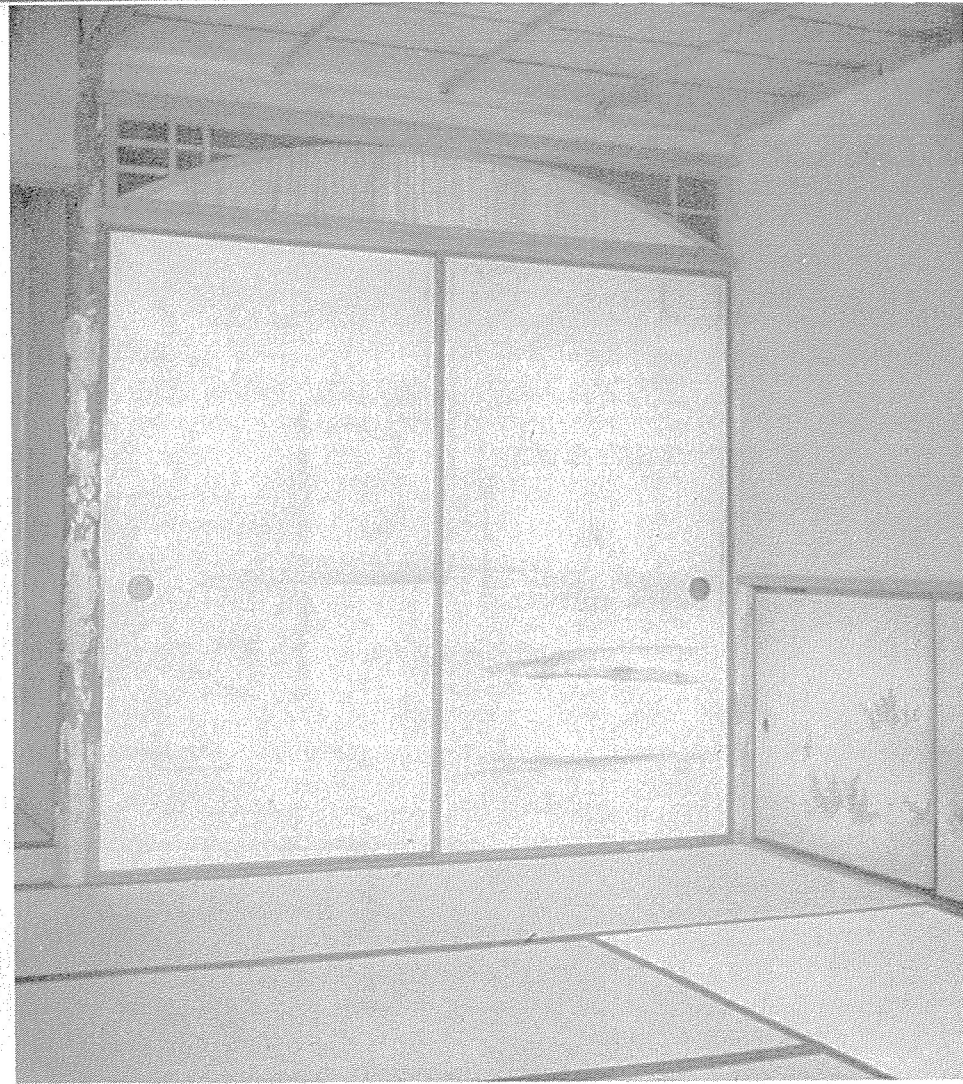
来歴 明治十二年、渋沢栄一(後の子爵)が飛鳥山に別邸を営んだ時に、益田鈍翁の令弟益田克徳が設計したものである。克徳は、明治大正にかけての有名な茶人の一人であり、新時代の茶室として興味ある設計である。

さらに、この席には渋沢栄一の子爵が附随している。渋沢栄一は、その旧主徳川慶喜が維新後、只管恭順の意を表しているのに対して、明治新政府の所遇がはなはだ冷淡であることに不満を懐いていた。それで渋沢は、伊藤、井上の諸公を説いて、慶喜と膝を交えて大政奉還に至った水戸家伝来の尊王精神の真意を聴かしたものである。

これが因となって、その後明治三十五年、慶喜は公爵を賜ることになったのであるが、その初めての会合はこの席で行なわれたのであった。この維新の名所ともいえるべき席も、戦災によって失われたことは残念である。

構造 無心庵は、飛鳥山の一角の崖際に建てられた萱葺の一棟で、明治時代には崖下を東北線の鉄道が走っていたものの、見渡すかぎ

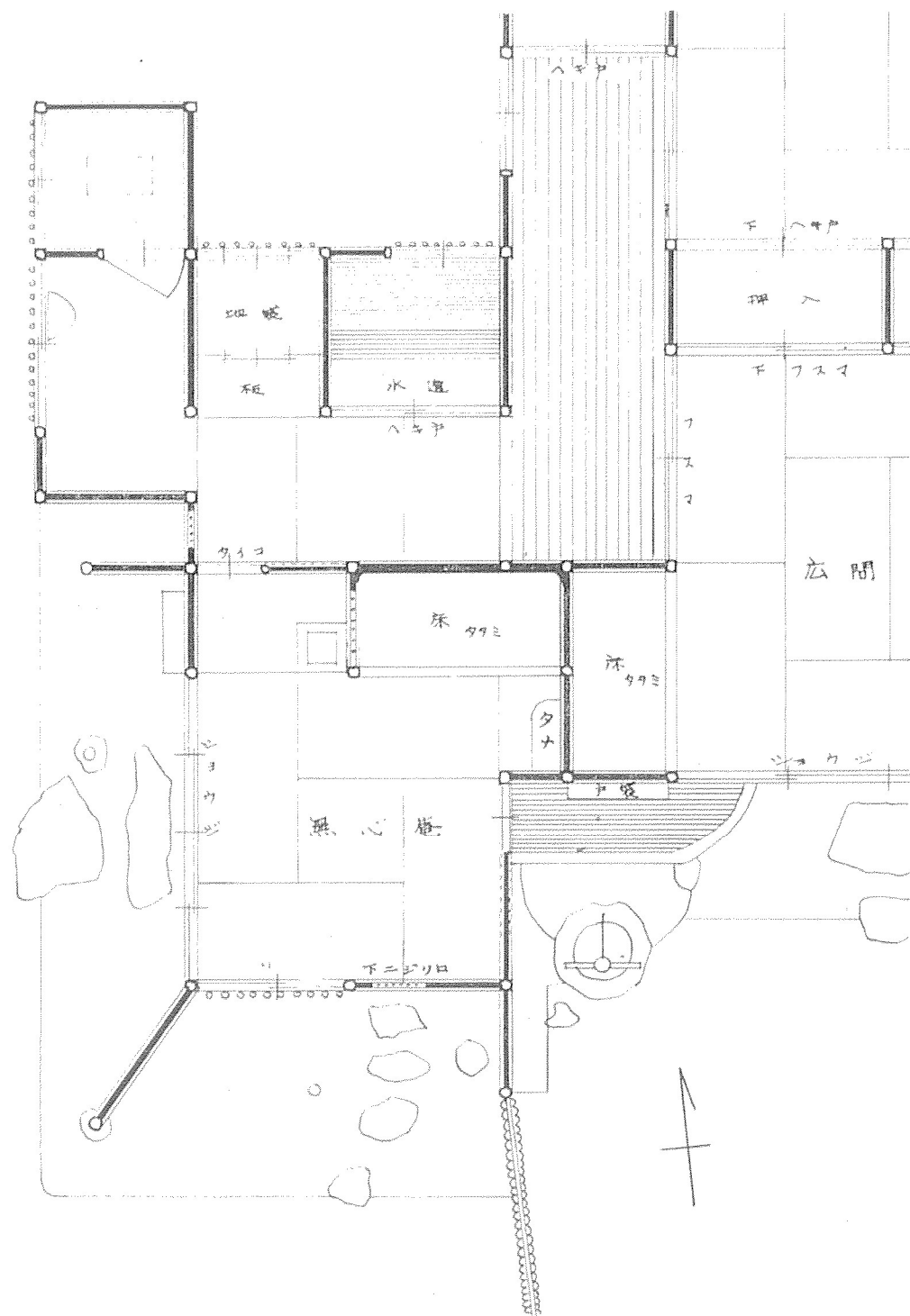
広間 襖の上は→
櫛形の欄間



り一面の青田で、わずかに渋沢が創業に関係していた王子製紙の煙突が見えたくらいであった、ということだ。

席は四畳半台目で、台目畳は六尺五寸もある床の間と並んでおり、炬は向切に切つてある。床の右手脇に板を入れ、棚を釣っている。席の南面の壁中央に柱を入れ、右側に躰口を切り、左側に連子窓を切った。西側は四枚の明障子で採光と貴人口とを兼ねている。東壁には一枚片引の障子が入って、ここより東側八畳の広間への通路となっている。床柱は香節、床脇の吹貫はそのまま風炉先となる裏千家の寒雲亭の形式を模している。天井は床内が土天井、四畳半の上は網代組み、台目畳上は葎の落天井を篠竹二本で押えている。北壁の左隅に方立の茶道口が切つてある。

茶道口の外部に三畳の水遣があり、その西に雪隠がある。八畳の広間は東に開き西側に一間の床の間と並んで、一間に二枚の襖が入り、この襖上の櫛形の欄間も寒雲亭そのままである。天井は床前半分が陸天井で、東半分



無心庵平面図



↑ 広間前の軒下

が舟底になっている。この東側障子の外部軒下を深くして、土間に瓦を敷き、崖に乘出した舞台の月見台に通じている。

さらに広間、月見台などが設けてあるの
で、観月の席などにはもってこいである。い
ろいろな目的を狙ったところに、設計者の近
代生活を身近に感ずる。

特色 席中が、四疊半台目という広々とした
構造であり、しかも向切炉のために、四疊半
はそのまま客用に使用できる。四枚の障子か
らの採光は十分である。もし、喫茶時に明る